佐藤春夫氏の事

芥川龍之介

一、佐藤春夫は詩人なり、何よりも先に詩人なり。或は誰よりも先にと云えるかも知れず。

二、されば作品の特色もその詩的なる点にあり。詩を求めずして佐藤の作品を読むものは、猶南瓜（かぼちゃ）を食わんとして蒟蒻（こんにゃく）を買うが如し。到底満足を得るの機会あるべからず。既に満足を得ず、而して後その南瓜ならざるを云々するは愚も亦甚し。去って天竺の外に南瓜を求むるに若かず。

三、佐藤の作品中、道徳を諷するものなきにあらず、哲学を寓するもの亦なきにあらざれど、その思想を彩（いろど）るものは常に一脈の詩情なり。故に佐藤はその詩

情を満足せしむる限り、乃木大将を崇拝する事を辞せざると同時に、大石内蔵助を撲殺するも顧る所にあらず。佐藤の一身、詩仏と詩魔とを併せ蔵すと云うも可なり。

四、佐藤の詩情は最も世に云う世紀末の詩情に近きが如し。繊婉にしてよく幽渺たる趣を兼ぬ。「田園の憂欝」の如き、「お絹とその兄弟」の如き、皆然らざるはあらず。これを称して当代の珍と云う、敢て首肯せざるものは皆偏に南瓜を愛するの徒か。

底本：「大川の水・追憶・本所両国　現代日本のエッセイ」講談社文芸文庫、講談社
　　１９９５（平成７）年１月10日第１刷発行
底本の親本：「芥川龍之介全集　第一～九、一二巻」岩波書店
　　１９７７（昭和52）年７、９～12月、１９７８（昭和53）年１～４、７月初版発行
入力：向井樹里
校正：門田裕志
２００５年２月20日作成
青空文庫作成ファイル：